

西郷南洲翁の漢詩

——平仄式による検証と解釈——

松尾善弘

まえがき

かれこれ半世紀にわたる中国語（以下、漢語）教学を通して、日本人は漢語の習得に拙い^{つたな}ことをことあるごとに思い知らされてきた。日本語の発音に比べ漢語音には新規にマスターしなければならぬ母音や子音が沢山あり、なかでも声調（四声）という独特の抑揚アクセントがあるため、流暢な漢語が口を突いて出るようになるまでかなりの反復訓練が必要になる。その上、表語文字・漢字で表記される漢語は、漢字一字一字の語音を語義と共に空で覚えねばならず、漢字がことばの最重要要素としての語音の習得を阻害する大きな要因ともなるのである。日本人は昔から漢字を受容してきたが漢字音伝承の際、その訛音の中にさえこの声調要素を取り込むことができなかった。

現代漢語で高く平らに発音する第一声（中古漢語の陰平声）、尻上りに発音する第二声（同陽平声）を「平声（以下、○印で表示）」という。ナベ底型に発音する第三声（同上声）と尻下りに発音する

第四声（同去声）、それに現代漢語音ではなくなっているが、昔、語尾に「p・t・k」の促音を伴っていた入声音（日本漢字音では語尾がフ・ツ・ク・チ・キとなる。例、蝶^{テフ}を合せて「仄声（以下、●印で表示）」という。つまり、すべての漢字をその漢字の持つ声調によって平と仄に二大区分するのが「平仄の原理」である。そうして、平声の漢字を三〇種、仄声の漢字を七六種（うち上声が二九、去声三〇、入声一七）に分類し、それぞれ代表する字（韻目）を定めて一覧表にしたのが「一〇六詩韻韻目表」である。

漢字音は、普通、『漢和辞典』を引くと「反切方式」で示されている。例えば「松」の字を引けば「祥容切（祥容の切、シヨウとヨウの子音と母音部分を切ってはり合わせた音）」という形で示してある。更にその親字の下に、同母音の語音を持つ韻目の字が^図のように示してある。四角枠の左下に印があるのが平声、左上が上声、右上が去声、右下が入声音であることを示す。

古代日本文人がそれらの漢字音をどこまで原音に近く発音できたか推測の域を出ないが、現代漢語の四声に照らして漢詩作品の押韻

や平仄を点検すると一〇〇％に近く正確に使いこなし作詩していることが分かる。

西郷南洲翁の漢詩も中国近体詩の諸規則に則って作られていることが押韻や平仄を点検することによって実証できる。平仄式の検証を通して、南洲翁の豊かな漢字力や秀れた詩才を余すところなく読み取ることができると言えよう。

現存する西郷隆盛の漢詩は最新刊の『西郷隆盛漢詩集』(――底本とする。詩題の通し番号も同書による)によれば総数一九七首ある。

今、それらを初句の平仄型によって分類すると次表のようになる。

初句平仄型	詩形		五言		七言		古詩
	絶句	律詩	絶句	律詩			
〔平起り平終り型〕 A	0	1	78	7	1	1	
〔平起り仄終り型〕 B	6	7	4	0			
〔仄起り平終り型〕 C	0	1	66	6			
〔仄起り仄終り型〕 D	7	5	8	0	1	1	
総計(小計)	(13)	(14)	(156)	(13)			(1)

基本平仄四型は次の通りである。

- 五言句
- 〔A〕 ○○●●○
 〔B〕 ○○●●○
 〔C〕 ●●●○○
- 七言句
- ○●●●○○○
 ○●●●○○○

〔D〕 ●●○○●●○○○
 五七言句とも例えば〔A〕ならば、トントン・ドントントン／トントン・ドンドン・ドントントンというリズムを持つ(2・3／2・2・3と切って読む)。

実作に当たっては次の諸規則を守らねばならない。

①〔二四六分明(二四不同二六対)、一三五不論〕基本平仄型通りに作れない場合も2字目と4字目は必ず反対に、2字目と6字目は同じ平仄になるように作る。135字目は基本型に反してもよいが、大切なのはその場合、135字目を互いに平仄を反対にして相殺すれば基本型と平仄数が同じになるようにしなければならない。これを「救拯」と言う。同一句内で相殺するやり方と隣り合う奇偶二句で相殺するやり方がある。

②〔平声字押韻〕偶数句末と初句がAC型の時、平声字で押韻させる。↓奇数句末は仄声字。

③〔反法〕1・2句／3・4句は反対の平仄式になるように作る(初句がAなら2句はC、BならC、CならA、DならA)。

④〔粘法〕2句と3句は同じ平仄式にする。但し124／12346字目はくつつく(粘)が、35／57字目はくつつかない(「頭粘尾不粘」)。↓違背したものを「失粘」と言う。

⑤〔孤平／孤仄を忌む〕平仄が●○○／○○○の形にならないように作る。特に孤平は大禁忌事項。

⑥〔下三連(下三平○○○／下三仄●●●)を忌む〕特に下三平

8	只 ● (○)	応 ○	非 ○ (●)	種 ●	蔬 ○	[A]
7	更 ●	要 ●	知 ○	真 ○	意 ●	[D]
6	今 ○ (●)	日 ●	好 ●	揮 ○	鋤 ○	[C]
5	昔 ● (○)	時 ○	常 ○	運 ●	甓 ●	[B]
4	燈 ○	前 ○	照 ●	読 ●	書 ○	[A]
3	壘 ●	上 ●	練 ● (○)	筋 ○	骨 ●	[D]
2	何 ○ (●)	用 ●	釣 ●	虚 ○	誉 ○	[C]
1	躬 ○	耕 ○	将 ○ (●)	暁 ●	初 ○	[A]

《押韻・平仄・対句の検証》

初(楚居切)、誉(羊諸切)、書(商居切)、鋤(牀魚切)、蔬(山於切)が上平六魚(牛居切)の韻。初句末が平終りだから当然押韻する。律詩の平仄式は5句末を仄終りにして、A—C—D—A—B—

—C—D—Aとなる。

1句3字目と2句1字目は基本型と逆にして救拯せず。3句3字目を●にしたため孤平の禁を犯した。

56句は1字目を逆にして二句での救拯。8句は13字目を互いに逆にして一句内で救拯した。

従って平仄数は結果的に○21対●19の作品ということになる。

筆者は基本型に対して救拯の手を打たず、わざと一ヶ所のみズッコケた詩を「一瑕疵完整美作品」と呼ぶことにしている。わざと一字外して完璧さを誇示したと見るのである。

3句と4句(韻連)、5句と6句(頸連)は対句にして作るのが常法である。その場合、対句の条件として、①語音(平仄)上の対、②語義上の対、③語法(句構造)上の対の三つの観点から対句と言えるかどうかを検証しなければならない。

先ず①については、34、56句とも「反法」によって作られているわけだから検証するまでもない。

②は34句が、壘上↓燈前(場所語)、釣↓照(動詞)、筋骨↓読書(名詞)。56句は、昔時↓今日(時間詞)、常↓好(副詞)、運↓揮(動詞)、甓↓鋤(名詞)ときれいな対義語になっている。

③は双方共、基本的に漢語の最もポピュラーな「主語S—動詞V—目的語O」構造句になっている。

以上、②③で若干の和臭を残しながらも、対句の三条件を十分満たした佳作と言えよう。

《訓み下しと通釈》

村舎に寓居する諸君子に寄す（吉野開墾社の宿舎に仮住まいする諸君に所信を寄せる）

- 1 躬耕は暁を將て初む（農作業は夜が明けると共に始める）、
- 2 何ぞ用て虚譽を釣らんや（どうしてつまらぬ外聞のよさを求める必要などあろうか）。

3 壘上筋骨を練り（日中は畑の中で身体を鍛え）、

4 灯前読書を照らす（夜はともしびの下で読書にいそしむ）。

- 5 昔時は常に壁を運ぶ（昔、晋の陶侃は朝晩瓦を運んで体を鍛錬したという）、

6 今日（こんにち）は好し鋤を揮へ（今時の諸君は、さあ鋤を揮おう）。

- 7 更に真意を知るを要す（諸君は更に農作業の真意を知る必要がある）、

8 只応に蔬を種うるのみには非ざるべし（ただ単に野菜作りのためだけではなく、国家有事に備えて心身を鍛えねばならぬということ）。

《補注》

〔運壁の故事〕 晋の陶侃は閑職にあつても朝夕百個の壁（磚・レンガ）を部屋の内外へ運び入れ運び出しては心身を鍛え、一旦有事の際に備えていたという。（『晋書』陶侃伝）

この詩から、西郷は西南戦争勃発前に陸軍教導団の下士官たちと開墾や農作業に従事しながら有事に備えていたことが分かる。開戦時の名分がどうであれ、又主動ではなかったにしても私学校生に強

いられる形でやむを得ず起つたというのは事実には反するであろう。

四 初句〔平一仄〕型五律作品例（七首中の二）

（一九一）祝某氏之長寿

8	神	仙	寿	域	躋	〔A〕
7	請	看	青	雲	外	〔D〕
6	隣	里	引	枯	藜	〔C〕
5	芳	筵	傾	玉	盞	〔B〕
4	延	齡	龜	鶴	齊	〔A〕
3	走	筆	龍	蛇	躍	〔D〕
2	百	事	滌	塵	迷	〔C〕
1	窮	通	自	忘	却	〔B〕

《押韻・平仄・対句の検証》

迷（綿批切）、齊（前西切）、藜（隣題切）、躋（牋西切）が上平八斉の韻。

1句3字目、4句3字目、6句1字目の平仄を逆にして救拯せず。全詩の平仄数は○21対●19。

34句は、走／筆↓延／齡が「動V／目O」構造、龍蛇／躍↓龜鶴／齊が「主語S／動V」構造の対。56句は、芳筵↓隣里「場所語」、傾↓引「動V」、玉盞↓枯藜「目的語O」の見事な対句になっている。

《訓み下しと通釈》

某氏の長寿を祝ふ（ある人の長寿を祝う）

1 窮通 自ら忘却し（この方は人間の貧窮とか栄達とかをすっかり忘れ去り）、

2 百事 塵迷を滌ふ（万事につけ俗世の迷いごとを洗い流している）。

3 筆を走らさば龍蛇躍り（筆を走らせると恰も龍蛇が躍るように達筆で）、

4 齡を延ぶること龜鶴に齊し（長生きして龜や鶴と年齢を同じくしている）。

5 芳筵に玉盞を傾けんと（祝宴の席で一献差し上げたものと）、
6 隣里枯藜を引く（近隣の老人たちが枯れ藜の杖について集まって来た）。

7 請ふ看よ青雲の外（どうぞごらん下さい。この方があの青空の彼方）、

8 神仙の寿域に躋るを（神仙と同じ長寿の世界にのぼって行かれるのを）。

五 初句〔仄―平〕型五律作品（本詩のみ）

（二二）辞 闕

7	正○	邪○	今○	那●	定●	[B]
6	武●	公○	難●	再●	生○	[A]
5	秦○	檜●	多○	遺○	類●	[D]
4	忘●	義●	唱●	和○	平○	[C]
3	雪●	羞○	論○	戰●	略●	[B]
2	豈●	聰○	歡○	笑●	声○	[A]
1	独●	不●	適●	時○	情○	[C]

8 ● ● ● ● ○ ◎ [C]

情(慈盈切)、声(書盈切)、平(蒲兵切)、生(師庚切)、清(親盈切)が下平八庚の韻。下手の八庚と擲揄されるポピュラーな韻目だが、西郷も最多用している。

2句13字目を互いに逆にして一句内での救拯。56句は1字目を逆にして二句にわたる救拯。従って本詩は3句1字目のみが基本型に違背した「一瑕疵完整美」作品である。

34句は、雪/羞↓忘/義、論/戰略↓唱/和平がそれぞれ「V/O」構造となった対句。

56句は、秦檜↓武公、多↓難、遺類↓再生が「S-V-O」構造の対句となっている。

▲訓み下しと通釈▼
闕を辞す(朝廷の官職を辞退する)

1 独り時情に適せず(私は最近、廟堂諸公の見解とそりが合わず意を得ない)、
2 豈に歛笑の声を聴かんや(だがこれ以上彼らの軽佻浮薄な談笑の声を聞こうとは思わない)。

3 羞を雪がんと戰略を論ずるに(私は国が蒙った恥辱を雪ごうと戰略を論じたのに)、

4 義を忘れて和平を唱ふ(反対派は道義を忘れて徒に和平を唱導する)。

5 秦檜遺類多く(宋の売国奴秦檜には盲従する配下が沢山いた)、
6 武公再生し難し(秦檜に讒言され獄死した岳飛のような忠臣は二度と生れ出ることはない)。

7 正邪は今那ぞ定まらん(どちらが正道でどちらが邪道か今すぐには決められまい)、
8 後世必ず清を知らん(だが、きっと後世の人々がどちらが正論であったかを判定するであろう)。

▲補注▼

〔秦檜・武公〕女真(金)の侵攻を受けて北宋が滅んだ後、高宗は南金に南渡して即位、南宋を再興した(一一二七年)。時の宰相・秦檜は金との和議を首唱、主戦派の岳飛(諡・武穆又忠武)を初め忠臣良将を尽く誅した。秦檜の讒言により獄死した岳飛は(享年三十九才)のち官職を復し鄂王に追封せられる。岳飛の墓側には「尽忠報国」四文字の碑が建つ。現在、西湖畔の墓前には銅造りの秦檜・妻の王氏・方侯高の三像が鎖に繋れ跪ずかされている。

一八七三年(明治六)十一月、「征韓論争」が破裂して西郷は近衛都督・陸軍大将の職を辞して帰鹿する。これはその直後に作った詩であろう。

果たして西郷が比喩した「秦檜」は誰であろう。又、自らを「武公」になぞらえているようだが、史実とどこまで符合するか、自意

識とのズレがないか、解明が待たれる詩句である。

六 初句〔仄―仄〕型五律作品（五首中の一）

（一九七）温泉寓居雑吟

8	天○ 霧●	7	悠○ 然○	6	清○ 涼○	5	疑○ 是●	4	樹● 下●	3	草● 間○	2	飛○ 泉○	1	避● 暑●
	对●		樹○		忘●		入●		夏●		虫○		静●		何○
	青○		濁●		熱●		仙○		猶○		早●		処●		辺○
	巒○		酒●		官○		境●		寒○		語●		看○		好●
	[A]		[B]		[A]		[D]		[C]		[B]		[A]		[D]

△押韻・平仄・对句の検証▽

看（丘寒切）、寒（河干切）、官（古丸切）、巒（盧丸切）が上平一四寒で押韻。

1 2 4 6 7句は基本平仄型通り。5句は1 3字目で救拯。但し孤平の禁を犯す。3 8句1字目を逆に作り救拯せず。しかし平○对仄●は20对20に戻っている。

3 4句は草間↓樹下が場所詞の对。虫↓夏が主語、早↓猶（副）がそれぞれ語（動）↓寒（形）にかかつて主述構造の对句となっている。

5 6句は疑是↓清涼、入↓忘、仙境↓熱官が对語となり若干齟齬をきたすが「S―V―O」構造の変形とみなす。いずれも对句三条件を十分満たしている。

△訓み下しと通釈▽

温泉の寓居にての雑吟

1 避暑には何れの辺りか好き（避暑地にはどのあたりがよいであろうか）、

2 飛泉を静けき処より看ん（流れ落ちる滝を静かな処から眺めよう）。

3 草間に虫早くも語り（草むらでは虫が早くも鳴きはじめ）、

4 樹下は夏猶ほ寒し（木陰は夏でも寒いくらい）。

5 疑ふらくは是れ仙境に入るか（どうやら仙境に入りこんだのでは思うほど）、

6 清涼に熱官を忘る（清々しい涼しさが多忙であった官職を忘れさせてくれる）。

7 悠然として濁酒を斟み（ゆったりとした気分で濁り酒を酌み）、

8 天霽るれば青巒あざに対す（晴れわたった空のもと青々と連なる山々に対坐するのである）。

七 初句〔平―平〕型七絶作品（七八首中の一）

（一四一）偶成

1	深	○	遮	○	塵	○	世	●	樹	○	陰	○	清	◎	[A]
2	幽	○	鳥	●	為	○	誰	○	窓	○	外	●	鳴	◎	[C]
3	最	●	喜	●	山	○	中	○	免	○	官	○	賦	●	[D]
4	曾	○	無	○	俗	●	吏	●	叩	○	柴	○	[門]	○	[A] ◎ (荆/局) ◎

《押韻・平仄の検証》

清（親盈切）、鳴（眉兵切）が下平八庚の韻。すると4句末の門（謨奔切、上平一三元韻）は明らかに誤用である。ここは門の類義語の「荆（居卿切、庚韻）」か「局（消熒切、下平九青韻との通押）」に

すべきである。（『全』に一本荆に作るとある）

1句3字目を逆にしたまま救拯せず。2句13字を互いに逆にして救拯。4字目の孤平を嫌って5字目も平にした。ために6字目は軽い孤仄の禁を犯す。3句56字は○●とあるべきところを●○の拗体にした特殊型である。

《訓み下しと通釈》

偶成（たまたま成る）

1 深く塵世を遮まぎらって樹陰清く（山奥深く俗世と隔てられてわが家はひっそりと森陰に建っている）、

2 幽鳥誰が為にか窓外に鳴く（窓の外では山鳥が誰のためというのでもなく鳴いている）。

3 最も喜ばしきは山中にて官賦を免れ（最も嬉しいのは山中のこととて租税を免ぜられ）、

4 曾かて俗吏の柴荆を叩く無し（これまで一度も小役人が柴の戸を叩くことがなかったことだ）。

八 初句〔平―仄〕型七絶作品（七首中の一）

（一七〇）中秋無月（一）

1	今	○	宵	○	光	○	景	○	如	○	何	○	趣	●	[B]
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-----

2 一 ● 陣 ● 西 ○ 風 ○ 送 ● 雨 ● 声 ◎ [C]
 3 万 ● 事 ● 人 ○ 間 ○ 多 ○ 失 ● 意 ● [D]
 4 中 ○ 秋 ○ 独 ● 不 ● 闕 ● 清 ○ 明 ◎ [A]

△押韻・平仄の検証▽

声（既出）、明（眉兵切）が下平八庚の韻。

1 句3字目のみが基本平仄式に違背したいわゆる「一瑕疵完整美」作品である。以上見てきたように西郷の漢詩は平仄上はほぼ完璧だが語法上或いは語義運用上やや難（和臭）がある。そのため筆者の漢語力を以ってしては、訓読や訳出の際随処で難渋するのである。

△訓み下しと通釈▽

中秋無月（中秋に月無し）

1 今宵の光景如何なる趣ぞ（月の出ない今宵の光景は一体どのような天の趣向によるものか）、（起）

2 一陣の西風雨声を送る（一陣の西風が雨音を伴って吹いてきた）。（承）

3 万事人間失意多けれど（何事につけ思うに任せぬことの多いこの世の中であるが）、（転）

4 中秋独り清明を闕かざるを（いつの時代も中秋だけは光り輝く

名月を闕かないものなのに）。（結）

九 初句〔仄―平〕型七絶作品（六六首中の二）

（六二）感懷

1 幾 ● 歴 ● 辛 ○ 酸 ○ 志 ● 始 ● 堅 ◎ [C]
 2 丈 ● 夫 ○ 玉 ● 碎 ● 愧 ● 甄 ○ 全 ◎ [A]
 3 一 ● 家 ○ 遺 ● 事 ● 人 ○ 知 ○ 否 ● [B]
 4 不 ● 為 ● 兒 ○ 孫 ○ 買 ● 美 ● 田 ◎ [C]

△押韻・平仄の検証▽

堅（経天切）、全（従縁切）、田（亭年切）が下平一先の韻。初句末が平だから当然押韻する。七言詩は初句末も押韻する初句AC型が正格作品となる。作品数でもこの二タイプが絶対多数を占めることがそのことを証明する。初句BD型は偏格作品。これは五言詩作品とはちょうど逆現象となる。

1 4 句は基本平仄型通り。2 句1 字目は平であるべきを仄に作り救拯の手を打っていない。3 句1 3 字目は互いに逆にして救拯。従っ

て本詩も「一瑕疵完整美」作品である。

一本で3句1字目を「我●」に、4字目を「法●」に作る。平仄上はどちらでもよいが、「一」「事」のフアジーさに比べ「我」「法」の方が意味的には明確さが増すようだ。しかし、逆に「一」「事」の方が一般性・ひろがりがあると言えよう。

《訓み下しと通釈》

感懐（心に思うこと）

1 幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し（何度もつらく苦しい経験を經てこそ人間の志は堅固になってゆく）、

2 丈夫は玉碎するも瓢全を愧ず（ひとかどの男子はたとえ玉碎してもなすところなく無駄に生きることを恥ずるものだ）。

3 一家の遺事を人知るや否や（わが家の家訓を人様はご存知だろうか）、

4 児孫の為に美田を買わず（それは子孫のために肥沃な田畑を買わないということだ）。

《補注》

1 句は、辛酸を「嘗（辰羊切、平声○）む」が常套語だが平仄の関係で「歴（狼狄切、入声●）る」にしたと考えられる。

2 句は『北斎書（元景安伝）』に「大丈夫寧可玉碎、不能瓦全（大丈夫は寧ろ玉碎すべくも、瓦全する能はず）」による。ここでも原文の「瓦（五寡切、上声●）全（為すことなく徒らに生をむさぼること）」を平仄上同義語の「瓢（朱耄切、平声○）全」に変えてい

ることが分かる。

南洲翁が平仄の整合性を求め、基本平仄式に合わせようと腐心している姿が垣間見える。

さて、明治四年作とされる本詩のこの2句は、明治十年七月三十日に宮崎本営軍務所から出された薩軍兵士への廻文（奮戦督励のピラ）「諸隊順達」冒頭にも引用されている。³

瓦となつて全たからんより玉と成りて碎けよとは、各自予て知る所、今更また何をかいはん、（中略）豈に汚名汚名と敵に降り軍門に惨刑せらるるを愧ざらん哉、（後略）

—（『浪花新聞』八月二六日）による—

これは原漢文を仮名書にやわらげたものだが、内容と共に薩軍兵士がどこまで読み解き文字通り奮励努力して死に赴いて行ったか、興味が尽きないと言えは不謹慎になるだろうか。

4 句の「美田」に対する対義語は「薄田」。相對思考に富む西郷はここで「財産を残すな」と言っているのではなく、必要最低の田畑は残しても必要以上に肥沃な田畑を買い与えるなど誠めているようである。当時の成り上り官僚どもの奢侈な生活実態に対する厳しい批判が込められていると解しても深読みにはなるまい。

一〇—(1) 初句「仄—仄」型七絶作品（五首中の一）

（二八）除夜（『遺訓』では「失題」）

1 白 ● 髮 ● 衰 ○ 顔 ○ 非 ○ 所 ● 意 ● [D]
 2 壮 ● (○) 心 ○ 横 ○ (●) 劍 ● 愧 ● 無 ○ 勳 ● [A]
 3 百 ● (○) 千 ○ 窮 ○ (●) 鬼 ● 吾 ○ 何 ○ 畏 ● [B]
 4 脱 ● 出 ● 人 ○ 間 ○ 虎 ● 豹 ● 群 ● [C]

△押韻・平仄の検証▽

勳(許云切)、群(衢云切)が上平一文(無分切)で押韻。

2 3句とも1 3字目を互いに逆にして救拯。従って本詩は平仄上完璧な作品に仕上がっている。平○対仄●は14対14。

△訓み下しと通釈▽

1 白髪衰顔 意とする所に非ず(しらが頭やしわの出た顔は別に気にするものではないが)、

2 壮心 剣を横たへて勳無きを愧ず(高邁豪気な精神を持ち腰に大刀を差しながら勳功をあげえないことが恥ずかしい)。

3 百千の窮鬼 吾何をか畏れん(たとえどれほど多くの幽鬼が生まれ出るようになるうとも私は何で怖じおそれようか)、

4 脱出せん人間虎豹の群(何とかしてこのいまましい俗界の虎狼の群から脱出したいものだ)。

△補注▽

〔窮鬼〕は『漢和辞典』に①貧乏神。②貧乏人を罵る語とある。「日本鬼」で有名な〔鬼〕は①亡霊、幽鬼。②死人のおぼけ。③地獄で死者を扱う者や死人たちのこと。3句の場合は後者の意味で解するのが妥当であろう。

〔畏〕①威圧を感じて心がすくむ。おびえる。②(形)こわいさま(転じて)尊敬すべき、畏友。③かしこし、おそれつつしむ。

3 4句には西郷のふてぶてしいまでの気概と誤算・魂胆・覚悟、一口で言えば「チエスト行け」精神の発現が見える。「除夜」の作だから「窮鬼」は借金取りのことではなどという浅解には与しない。⁵⁾

小川原正道氏は、この詩は狩獵中を呼び戻され鹿兒島へ帰る途中に詠んだものと言う(明治一〇年二月一日か二日)⁶⁾。いくつか疑義があるが今しばらくその詮索は措く。ただ、そこに掲げられた「西南記伝」よりの引用による本詩があまりにも安直なミスを犯しているの指摘しておきたい。

- 1 白髪衰顔非所為(于嬌切、支)
- 2 壮心横劍愧無動(徒弄切、送)
- 3 百千窮鬼吾何畏
- 4 脱出人間虎豹群

初句末は基本平仄型では仄声字であるべきもの(「平—仄型」)。仮に「平—平型」に作つたとすれば2 4句末と共に押韻させねばな

らないが全くその気配がない。2句末は恐らく「勲」字の写し間違
いと思われるが、もしそうだとすれば尚更のこと漢詩規則の大原則
である故「西南記伝」記者か小川原氏がそのことにいち早く気づく
べきであったのだ。

一〇―(2) 初句〔仄―仄〕型仄声押韻七絶作品

(九七) 田獵

1	提	銃	携	葵	如	〔攻〕	敵	[D]
	○	●	○	○	○	○	●	
2	峰	頭	峰	下	慙	勲	覓	[B]
	○	○	○	○	○	○	●	
3	休	嗤	追	兔	老	夫	勞	[A]
	○	○	○	○	○	○	○	
4	欲	以	遊	田	換	運	蹩	[D]
	●	●	○	○	○	○	○	

《押韻・平仄の検証》

初句が仄終りで、そのまま仄声押韻した平声押韻の逆パターン作
品である。全作品を通じて仄声押韻作品は本詩一首のみである。

敵(亭歴切)、覓(莫狄切)、蹩(蒲歴切)が入声一二錫(失的切)
の韻。

1句1字目、2句3字目は逆にしたまま救拯せず。3句3字目と
4句5字目は互いに逆に逆にして二句にわたる救拯。但し、4句はため
に下三仄の禁を犯した。

問題は1句6字目が●であるべきところを○にして「二六対」の
大原則を犯してしまったことである。「対●」とか「討●」にすべ
きであった。「全」頭注に一本「政(うつ)●」に作るとある。

《訓み下しと通釈》

田 獵(田・獵ともに狩りの意)

1 銃を提げ葵を携へて敵を「政」つが如く(獵銃を手にとりどもを
連れてあたかも敵を攻撃するように)、

2 峰頭峰下慙に覓む(山々の頂上から麓まで隈なく獲物をさが
し求める)。

3 嗤ふを休めよ兔を追へば老夫勞ると(兎狩などは年寄の冷や水
だなどとあざ笑いしないでほしい)、

4 遊田を以って運蹩に換へんと欲す(私は狩獵を陶侃の瓦運びの
ように身体の鍛錬の場にしようと思っっているのだから)。(二に既出)

一 初句〔平―平〕型七律作品(七首中の一)

(一) 獄中有感(『遺訓』は「獄中所感」)

1	朝	蒙	恩	遇	夕	焚	阬	[A]
	○	○	○	●	●	○	○	

8	願 ● (○)	留 ○	魂 ● (○)	魄 ●	護 ●	皇 ○	城 ◎	[A]
7	生 ○ (●)	死 ●	何 ○	疑 ○	天 ○	付 ●	与 ●	[D]
6	南 ○ (●)	嶼 ●	俘 ○	囚 ○	独 ●	窃 ●	生 ◎	[C]
5	洛 ● (○)	陽 ○	知 ○ (●)	己 ●	皆 ○	為 ○	鬼 ●	[B]
4	若 ● (○)	無 ○	開 ○ (●)	運 ●	意 ●	推 ○	誠 ◎	[A]
3	縦 ●	不 ●	回 ○	光 ○	葵 ○	向 ●	日 ●	[D]
2	人 ○ (●)	世 ●	浮 ○	沈 ○	似 ●	晦 ●	明 ◎	[C]

△押韻・平仄・対句の検証▽

阮(坑に同じ。丘庚切)、明(既出)、誠(時征切)、生(師庚切)、城(時征切)が下平八庚の韻。

1句3字目、2句1字目とも●を○に作り救拯せず。45句は1
3字目を互いに逆にして救拯。6句は1字目救拯せず。78句は1
字目を互いに逆にして二句にわたる救拯。結果的に○対●は32対24
で平声字が多い詩となった。

34句は縦↓若(接続助詞)、不(否定副詞) ↓無(否定動詞)、
回/光↓開/運「V/O」、葵/向/日↓意/推/誠「S/V/O」
の対句。56句は洛陽↓南嶼(地名)、知己↓俘囚(名詞)が主語
Sとなり、皆↓独(副詞)、為/鬼↓窃/生が「V/O」構造。平仄・
語義・語法にわたってきれいな対をなしている。

△訓み下しと通釈▽

獄中感有り(「獄中の所感」)

1朝に恩遇を蒙り夕には焚阮せらる(朝、君主の恩寵を忝なくし
たと思うと夕方には焚書坑儒の憂き目にあつた、

2人世の浮沈は晦明に似たり(人の世の浮き沈みはまるで昼と夜
が交代するのに似て変転きわまりない)。

3縦ひ光を回らさずとも葵は日に向かふ(たとえ日光を当てなく
てもひまわりは太陽に向かつて咲くものだ)、

4若し運を開くこと無きも意は誠を推さん(もし不運な目にあつ
ても自分は皇国に対する真心を押し通したい)。

5洛陽の知己は皆鬼と為り(京洛の親友たちは皆鬼籍に入り)、

6南嶼の俘囚独り生を窃む(南の小島にとらわれ人の自分だけが
ぬくぬくと生きている)。

7生死何ぞ疑はん天の付与なるを(人の生死が天命によることは
疑いないことだが)、

8願はくは魂魄を留めて皇城を護らん(願くば死んでも魂をこの
世に留めて宮城をお守りしたいものだ)。

《補注》

〔焚坑〕 秦の始皇帝が行なった思想弾圧「焚書坑儒」。紀元前二一三年、始皇帝は宰相李斯の建議により、自分の政治を批判する復古的書物を焼きすてさせ、儒学者教百人を生き埋めにしたという。〔史記〕 始皇本紀

〔洛陽〕 中国の古都（河南省洛陽市）。歴代王朝の首都・長安が西にあったのに対し東都という。ここでは京都のこと。

〔南嶼〕 南の小島。ここは沖永良部島。文久二年（一八六二）から一年半、西郷（三七才）はここに流され「囲い入り」の囚人として過した。

一二 初句「仄―平」型七律作品（六首中の一）

（一一） 蒙使於朝鮮国之命（「蒙朝鮮国之使命」）

4	応	○	●	擬	○	真	○	卿	○	身	○	●	後	○	名	◎	[C]
3	須	○	比	○	蘇	○	●	武	○	歳	○	○	寒	○	操	●	[B]
2	鶏	○	林	○	城	○	●	畔	○	逐	○	涼	○	行	◎	[A]	
1	酷	●	吏	○	去	○	○	来	○	秋	○	○	氣	○	清	◎	[C]

5 欲 ● 告 ● 不 ● ○ ○ 言 ○ 遺 ○ 子 ● 訓 ● [D]

6 雖 ○ 離 ○ 難 ● 忘 ● 旧 ● 朋 ○ 盟 ◎ [A]

7 胡 ○ 天 ○ 紅 ○ ● 葉 ● 凋 ● 落 ○ 日 ● [B]

8 遙 ○ ● 扞 ● 雲 ○ 房 ○ 霜 ○ ● 劍 ● 横 ◎ [C]

《押韻・平仄・对句の検証》

清（既出）、行（何庚切）、名（彌并切）、盟（眉兵切）、横（胡盲切）が下平八庚の韻。

1句3・5字目を逆にして救拯。但し6字目は孤仄。2句3字目は逆にして救拯せず。

3句の「比」は普通（補履切紙韻）だが、（頰脂切支韻）もある。3・5字目を互いに逆にして救拯。但し6字目が孤平の禁を犯している。4句1・5字目は相殺されず。

5句は3字目を逆に作って救拯せず。6句3字目はこの時●。

7句3字目も救拯せず。8句は1・5字で相殺されず、6字目が軽い孤仄の禁を犯す。○対●は33対23。平声字がかなり優勢な韻律

的には軽く明るい作品と言えよう。
《訓み下しと通釈》

朝鮮国に使ひするの命を蒙る

〔朝鮮国への使ひの命を蒙る〕

1 酷吏こくし去り来ききて秋気清し（猛暑が去って清々しい秋の気配が漂っている）、

2 鶏林城畔 涼を逐おひて行かん（こういう時節に私は朝鮮国へ行き都城郊外を涼を求めて歩きたいと思う）。

3 須すべらく比ひすべし蘇武そぶ歳寒さいかんの操（私の忠節をぜひ酷寒に耐えて使命を守った蘇武の節操と比べてもらいたい）、

4 応まもに擬ぎすべし真卿しんけい身後（また、処刑された後、誉を得た顔真卿のように、私も後世に忠義の臣として名を残したいものだ）。

5 告つげんと欲ほして言いはず遺子（残される子供に一言注意しておこうと思ったがやめにした）、

6 離はなると雖いも忘われ難がたし旧朋（離れ離れになっても旧友と盟約した事は忘れるものではない）。

7 胡天（朝鮮の山々の紅葉がしばみ落ちる頃）、
8 遙はかに雲房（和平交渉を成立させて宮城を遙拝しつつ静かに利剣を側に横たえたいものだ）。

《補注》

〔酷吏〕 大暑、酷暑のこと。

〔去来〕 ここでの「来」は語調を整える助字ととる。

〔鶏林〕 もと新羅しらぎの別称。のち、朝鮮全体の称。

〔城畔〕 京城・ソウルのほり。

〔蘇武〕 漢の武帝の臣。匈奴に使ひし穴蔵に幽閉されて十九年。酷

寒・飢餓の苦難に耐えて節を守り、次の昭帝が匈奴と和睦するに及んで生還するを得た。〔前漢書五十四〕「蘇武持節」は『蒙求』の標題。

〔真卿〕 唐、顔真卿（諡、文忠）。安祿山の乱に抗して功績あり。のち李希烈の説諭に失敗、縊殺いせきせらる。書家・顔魯公としても著名。

〔唐書〕 一五三

〔胡天〕 胡国、胡地。「胡」は中国では主として匈奴を指す。ここでは朝鮮国。

〔雲房〕 雲のたちこめる高い家。道士・僧などの居室の謂だが、ここでは宮城・皇居を指す。

〔霜劍〕 するどい劍。霜刃、霜刀、利刃、利劍も同じ。「霜劍横」は「除夜」にも「横劍」とある如く、平仄と押韻の関係で「横霜劍」を転倒させたもの。「横劍」は「大刀を腰に差す」と訳したが、ここで

「利劍を腰に差す」と訳すには違和感がある。同様に「大刀を腰に差す」と訳しても「宮城遙拝」とどのように関連するのかわかりにくい。つまり、「霜劍横」は意味深長だが、それ以上に

「遙拝雲房」との関連がしっくりいかない。言い換えると、ここには猪飼隆明氏が言う通り、「大義名分」作りの征韓論と実体上の征韓論の矛盾が象徴的に露呈していると考えることができるだろう。

4 5句には中国の故事を引き合いにして「使節暴殺」の危険を冒しても遣韓使としての役目を果たしたい西郷の決意が表明されている。裏を返すと、ここにも西郷の「死願望」が表れ出ている

言えよう。明治六（一八七三）年八月 西郷四十五歳の作

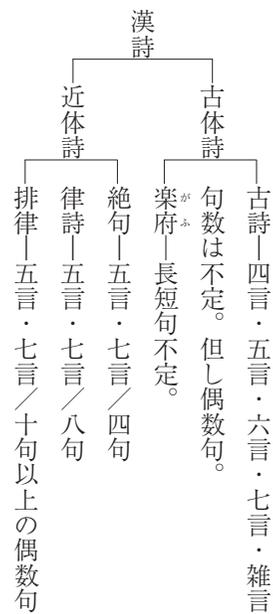
一三 五言古詩作品（本詩一首のみ）

（七七）示子弟（三）

- 1 我 ● 有 ● 千 ○ 糸 ○ 髮 ● （方伐切、入声六月韻）
- 2 毳 ○ 毳 ○ 黑 ● 於 ○ 漆 ● （戚悉切、入声四質韻）
- 3 我 ● 有 ● 一 ● 片 ● 心 ○
- 4 皓 ● 皓 ● 白 ● 於 ○ 雪 ● （相絶切、入声九屑韻）
- 5 我 ● 髮 ● 猶 ○ 可 ● 断 ● （徒玩切、去声十五翰韻）
- 6 我 ● 心 ● 不 ● 可 ● 截 ● （昨結切、入声九屑韻）

《古詩形式の解説》

古体詩と近（今）体詩の判別から始めよう。



唐代に至って平仄・押韻等の諸規則が確立し、近体詩と称せられる。作詩上の諸法則は「まえがき」で解説済み。古詩の押韻は平声・仄声押韻可。近体詩の一韻到底に対し、換韻も許されるのが異なる点である。

本詩は髮・漆・雪・截が入声韻での通押。

古詩には押韻以外の平仄上の規則は一切ないことが本詩を見れば一目瞭然であろう。規則に縛られない分、古詩の方がむしろ自由奔放な詩を作りやすいことを蛇足ながらつけ加えておこう。

《訓み下しと通釈》

子弟に示す（若者たちに示す）

- 1 我に千糸の髮あり（私には幾千本もの髮の毛があり）、
- 2 毳毳として漆よりも黒し（房々として漆よりも黒い）。
- 3 我に一片の心あり（私にはただ一片の心があり）、
- 4 皓皓として雪よりも白し（明るく汚れなく雪よりも白い）。
- 5 我が髮は猶ほ断つべくも（私の黒髮は断ち切ることもできる

が、

6 我が心截るべらかず（私の心は決して切り取ることはできない）。

《補注》

〔麩毳〕 房房と髪の毛の長いさま。

〔皓皓〕 明るく潔白なさま。

西郷の漢詩一九七首中、本詩のみが古詩形式作品である。ちよつと茶目つ気を出したものと云うべきか。それでもこれだけの押韻の厳密さを見せている。5句末は○字にすべきところ。

一四 西道仙作「城山」の分析

1	孤	○	軍	○	奮	●	鬪	●	破	○	囿	○	還	◎	[A]
2	一	●	百	●	里	●	程	○	堅	○	壘	●	間	◎	[C]
3	吾	○	劍	●	既	○	折	○	吾	○	馬	●	斃	●	[D]
4	秋	○	風	○	埋	○	屍	●	故	●	郷	○	山	◎	[A]

《詩形・押韻・平仄の検証》

七言絶句〔平起り平終り型〕作品。還（胡閑切）、間（居閑切）、

山（師間切）が上平一五刪（師姦切）の韻。

1句は基本型通り。2句は3・5字目を互いに逆にして救拯。但し6字目が軽い孤仄の禁を犯した。

3句は1・3字を使つての救拯。折（之列切●）には（田黎切○）もある。すると本詩は4句3字目のみが基本型に違背したいわゆる

「二瑕疵完整美」作品となる。

《訓み下しと通釈》

1 孤軍奮鬪 囿みを破つて還る（孤軍奮鬪し敵の包圍網を破つて帰還した）、

2 一百の里程堅壘の間（守りの堅いとりのある百里の行程の間を）。

3 吾が劍は既に折れ吾が馬は斃る（刀折れ矢尽き吾が馬も斃れた）、

4 秋風屍を埋む故郷の山（秋風が吹いて故郷の山々に兵士の死体を埋めたことだ）。

《鑑賞》

平仄上は文句ない詩に仕上がっているが、2・4句の語義と語法の関連がギクシャクして訳しづらい。悲壮感が先に立つて説明的となり、吾が吾がと我意が前面に出すぎている。意気は壮とするが詩想に乏しい感想を持つ。

南洲作と誤解されている漢詩がこの外にも数種あるようだが、概して本作品と大同小異である。総じて西郷漢詩の持つ詩想の豊かさ。

真摯さ・心の叫びに遠く及ばず、表層的な西郷賛美の内容のものが多きようである。

かりに西郷作品を強引に採点して、詩想(内容)面を90点、形式(押韻・平仄・語義・語法・対句)面を80点とする時、対比してこれらの作品には何点の評点をつけられるだろうか。

あとがき

漢詩とは何ぞや。それは中国文人が表語文字・漢字を表記道具として作った漢語の韻文作品である。従ってそこには韻律(リズム)があり、漢語特有の声調要素をフルに活用した押韻を初め平仄の表現法則がある。

五ノ七言句の「仄―平」型を例にとると、ドンドン・ドントントンノドンドン・トントン・ドンドントンノというリズムと語の軽重・抑揚を持つのである。それぞれ四種の平仄基本型と、平声押韻や反法・粘法の規則を同時に適用して四種の基本平仄式を作り、そのパターンに合わせて実作してゆくのが近体詩の作詩法である。

近体詩では何故「平声押韻」を準則とするのだろうか。それは恐らく漢詩は本来吟誦されるものであり、句末字を平声字にすることによって高く朗らかに長く引いて吟ずるのに最も適しているせいであらう。そのように、韻文作品であるからには一詩の価値の半分をその詩の音声面が荷っているとして過言ではあるまい。

中国古代文人に倣って漢詩作りをした平安から明治に至る日本人が漢語原音にどこまでなじんでいたか確言できない。しかし、その作品の平仄を近体詩作詩法に照らして検証すれば、限りなく彼らの漢語力の実態に近づくことができる。漢字ならば詩がはびこっている昨今、それらまがいのもの漢詩とほんものの漢詩を峻別する鑑定法としても、現代漢語を基盤にした語義・語法・語音にわたる科学的鑑賞法が要求されるのである。

換言すれば、勝部氏も言うように^⑨、近代科学の発達した今日、中国思想にしろ中国文学にしろ、それらの真の意味に到達するには近代科学のフィルターにかけシャッフルしなければならぬと思う。もはや時代おくれの漢文訓読法では絶対に漢詩の神髓に肉迫して読解することはできず、一昔前までの漢詩人たちの高みにまで到達することも出来ないであらう。

大西郷の漢学や書家としての力量は、流謫時代に培われたものが大きいようだ^⑩。特に漢詩制作に当たっては川口雪蓬のよき訓育指導を得て立派に成長した様子が如実に伺える。本論文ではその遺作の約一割ほどを見てきたが、近体詩の作詩法則に見事に合致する作品を読み解きながら、幽囚生活の中で悠々と詩作に励むと言うより興ずる両人の姿が目浮かぶ思いがした。

福沢諭吉が「西郷の罪は不学、在り」と言い、木戸孝允が「西郷は、無識」と言う時の「学識」は決して「学問」の意ではあるまい。

西郷は自らの学問が「学者になりそうなあんばいにござ候」と豪語するほど学識豊かな人間であった。ただ彼の学問は儒学を中心とする日本古来の漢学であった。しかもその学識が深まれば深まるほど儒教の根本精神「三綱五常（社会構成の根幹をなす君臣・父子・夫婦の三つの太綱と常に身に備えるべき仁・義・礼・智・信の五徳）」に対する信奉も強まった。そうしてそれが逆に自縄自縛となつて、近代文明の西洋の学問に精を出したり、時勢に臨機応変に対処する見識の目を培うことにブレイキがかかつてしまったのではないかと私案中である。

(二〇〇八・九・一七記)

(注)

- 1 『西郷隆盛漢詩集』山田尚二・渡辺正編訳 西郷南洲顕彰会 発行 平成二〇・四・三〇
- 2 西田実『大西郷の逸話』南方新社 二〇〇七・九・二〇
「西郷は自らを岳飛に、岩倉・大久保らを秦檜に比している」
- 3 猪飼隆明著『西郷隆盛―西南戦争への道―』岩波新書 二〇〇六・一一・二二
- 4 『西郷南洲遺訓』山田済斎編 岩波文庫 一九三九・二・三
初版
- 5 『西郷隆盛全集』第四卷 大和書房 昭五三・七・三二

本詩の頭注

- 6 小川原正道著『西南戦争』中公新書 二〇〇八・三・一〇
- 7 3に同じ。猪飼氏は日本人の朝鮮軽蔑視がどこから生ずるか論考すべきと論じている。
- 8 勝部真長『西郷隆盛』PHP文庫 二〇〇七・一一・二二
- 9 8に同じ。
- 10 2に同じ。
- 11 3に同じ。